

# 世界とつながる教室

JICAの開発教育支援

このコーナーでは、各地の教育委員会や学校、NGOなどによる開発教育・国際理解教育の実践・普及を支援するJICAのさまざまな取り組みを紹介します。



## 第3回

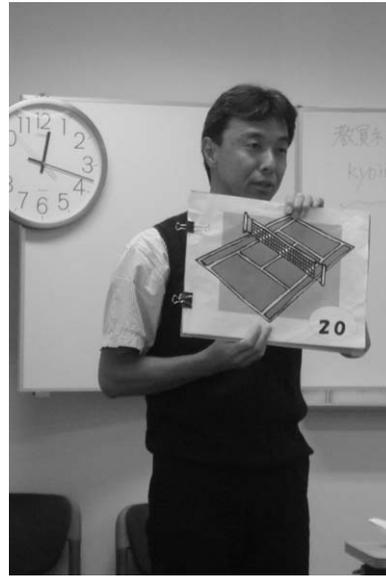
# 協力隊の経験を長野県の多文化共生に生かす

## 長野県教員等ネットワーク

長野県では、青年海外協力隊や海外の日本人学校に勤務した経験のある教員が、各地で開発教育に取り組んでいる。JICA駒ヶ根の支援のもと、そうした教員たちを束ね、経験を共有していくこととするネットワークが発足した。その活動には、外国籍児童の未就学問題に悩む長野県教育委員会も期待している。

ずにいるという声が寄せられていました。

OB・OGが持つ異文化という壁を乗り越えた経験は、外国籍児童の支援に生かせるのではないかと。幸い、県内には開発教育や国際理解教育に熱心に取り組む先生方がいる。西村さんは、協力隊OB・OGやJICA駒ヶ根が実施する教員向けの研修に参加した人たちなどにも声を掛け、トレーニングリストを活用して情報の共有を図ってきた。ネットワークの発足で、それまで個人の授業にとどまっていた国際理解の取り組みが広がり、県の方針でもある「多文化共生」の土壌をつくるための活動が動き出した。



モデル授業を行う駒村さん。参加者はテニスコートの絵を掲げ、数秒数えたのち一人ずつその絵を下げていく。1秒間にテニスコート20面に相当する面積の森が消えている現状を実感するため、ゲームを用いた

同じ日の午後、JICA駒ヶ根で訓練中の隊員候補生も参加して、ネットワーク運営委員の駒村英明さん（長野県塩尻志学館高等学校教諭、協力隊OB）によるモデル授業が行われた。エクアドルで環境教育に携わった駒村さんは、森が消えていく速度が実感できる全員参加のゲームを紹介。現職教員特別参加制度で協力隊に参加する候補生には、「地域の生活用具などを持ち帰ると授業に使える」などと具体的なアドバイスをする。候補生からは「帰国後は自分もやってみよう」という意見が飛び出し、ネットワークの輪がまた一つ広がったようだ。

「ネットワークに参加するメリットは、人脈ですね」。運営委員の北原三代志さん（長野県須坂園芸高等学校教諭、協力隊OB）は、バングラデュで覚えたカラー作りなどを通して国際理解教育を実践しているが、ネットワークで知り合った駒村さんを地元の公民館に招き、話をしてもらったのだという。



5月20日、長野県各地からネットワークの運営委員を務める教員たちが集まり、今後の方針について話し合った

ポストターなどが飾られ、子どもたちによる解説文が添えられている。中山晴美さん（小諸市立美南が丘小学校教諭、協力隊OG）の場合は、隊員が配属されているカンボジアの小学校と勤務先の小学校をJICAのテレビ会議システム「JICANet」で結び、子どもたちの交流を実現させた。



カンボジアの小学校とJICA-Netを通して交流する小諸市立美南が丘小学校の生徒たち

5月の新緑が香るJICA駒ヶ根の一室で、小・中・高校の教員たちが、自身が取り組む開発教育の経験を交換している。この日集まったのは、「長野県教員等ネットワーク」の運営委員。立ち上げたばかりのホームページの内容や今後の活動などについて、活発な意見が飛び交う。2006年1月に発足した「長野県教員等ネットワーク」は、青年海外協力隊や海外の日本人学校に勤務した

教員らが、その経験を生かし、県の教育行政に望ましい国際理解教育のあり方を提案しようとしている。

「県内で働く外国人の子弟が学校へ行かないことが大きな問題になっていて、一昨年、県教育委員会から協力隊の経験を教育現場に生かしたいという相談があったんです」と、JICA駒ヶ根・市民参加協力隊担当の西村真由子さんは、ネットワーク設立の経緯を説明する。「一方で、県内の協力隊OB・OGの教員からは、自分の体験を社会に広げられ



駒ヶ根市立赤穂南小学校の「世界情報センター」で、インドネシアのレインスティックを手にする児童

国立大学付属学校および公立学校の教員が身分を保持したまま青年海外協力隊へ参加するための制度。年度末の3月に帰国できるなど、現職の教員が参加しやすいよう配慮されている。

### 長野県教員等ネットワーク

問い合わせ：JICA駒ヶ根(0265-82-6151)  
ウェブサイト：「世界に飛び出せ信州っ子」  
<http://kyoinnet-nagano.jica.go.jp/index.html>